

このページでは医療の最前線でご活躍されているメディカルセンターのドクターにリレー方式でご登場頂き、健康と医療についてお話して頂きます。

今月号は落合健太郎先生から歯科口腔外科がご専門の川邊睦記先生にバトンが移りました。

第228回

フィリピンにおける歯科衛生活動

MD Anderson Cancer Center Head and Neck Research,
Research Investigator 歯科医師/川邊睦記



同じ山陰地方で育ちました落合先生よりバトンをもらいました、西宮にある兵庫医科大学の川邊と申します。大学では口腔がんの基礎研究に加え、サーモグラフィを使用した皮弁血流に関する研究などを行ってまいりました。現在は、口腔がんの新薬開発・基礎研究に従事しています。

皆さんとは話のベクトルが違いますが、日本で立ち上げましたNPO法人DAREDEMO HEROにおける活動についてお話したいと思います。

フィリピンセブ島における貧困

リゾート地で有名なセブ島は華やかな面の裏には、深刻な絶対的貧困と相対的貧困問題が存在し、年収20-40万円程度の世帯が大半を占めます。そのため、著しい貧富の差を背景とした凄まじい教育格差があり、K12と呼ばれる学校教育制度が整備されつつありますが、急速な人口増加のため個々への教育が充実していない状態が続いています。そこで、我々の運営する団体DAREDEMO HEROは“DAREDEMO(Everyone) Can Become Hero.”を掲げ、年収20万円以下の世帯の児童に対する教育支援を主とする活動を行っています。具体的にはセブ島の住宅地に無償の放課後学習塾を設置し、勉強したいと強く望む貧困層の子どもたちに対し、十分な教育機会を与え、自国の貧困問題を解決できるリーダーの育成を目標としています。国際協力機構JICA、ジョンソンエンドジョンソンの競争的寄付金、民間社会奉仕団体の Rotary International Global Grantsを含め、様々なGrant獲得や大学との連携を行い、昼食提供、奨学金給付、包括的な教育支援を実施しています。今では、貧困層から初めてのフィリピン最高峰の大学への入学という実績を出し、奨学生の大学入学に関わる費用・学習などをすべて支援しています。

貧困層に対する歯科衛生指導

私は歯科医師なので、歯科衛生指導を行おうと発起し、現地に所有するNGO団体を通して、日本から参加していただいた歯科衛生士による①貧困スラム地区での口腔衛生指導(現地教会広場と住民広場にて)、②DAREDEMO HEROラーニングセンターでスライドを用いた口腔衛生指導をしました。貧困スラム地区では日本から持参した歯ブラシを支給し、画用紙にブラッシング方法を分かりやすく図示し、英語で講義(現地ピサヤ語(タガログ語の一種)の通訳者を同行)し、実地指導をしました。

貧困スラム地区では、歯ブラシが高価であるため(歯ブラシは現地日当



(写真1) 教会で歯科衛生指導を受けるホームレスや貧困地区に住む子どもたち

の半分程度の価格帯)、ブラッシングを経験した子どもは非常に少なく、一生懸命磨いていました(写真1)。しかし残念なことに、ブラッシングの重要性を理解できず、講座が終わったところで歯ブラシを破棄する子どもも多かったです。ラーニングセンターでは、受講対象がラーニングセンターで学習をしている知識レベルの高くなった貧困層の子どもたち(我々の団体の奨学生)であるため、効率的にブラッシングを覚えていき、その後も毎日ブラッシングを行って来ています。ブラッシング指導自体が新鮮であるからか、楽しそうに互いに口の中

を確認しながらブラッシングをしている姿が印象的でした(写真2)。またすべての歯に虫歯を有しているように見えたのも印象的です。同じ貧困地区の子どもたちでも、教育を受けている子どもたちと受けていない子どもたちの間に存在する道徳観や衛生観の違いを通じ、基礎教育の重要性を深く感じました。



(写真2) 当団体が支援する奨学生たち

NPO法人DAREDEMO HEROによる食事支援の重要性

貧困層にとって、食事は空腹を満たすためのものであり、栄養のバランスを考えるゆとりがありません。実際に子どもたちは、偏った食事により何らかの基礎疾患を抱えることが多く、勉強に集中できません。1日1食の肉と米しか食べない貧困層の子どもたちの食事において、野菜が副菜として並べられることはほとんどなく、子どもたちも野菜を嫌います。そこで、当団体は学習効率向上のために当団体の奨学生を中心とする子どもたちに栄養バランスのとれた食事を提供し、同時に、子どもたちと保護者に食事の大切さを学んでもらい、さらに自らの経験をより貧困な状況にある家族や隣人に伝えることで、より多くの人々に栄養バランスの取れた食事摂取の重要性を広める活動を行っています。実際に、奨学生たちは食事支援を受益することで、貧血や尿道炎をはじめとする基礎疾患は改善し、学習能力の上昇に伴い学業成績は大きく向上します。食育の重要性を強く感じさせる結果であり、日本でも同様に食育が重要であると推察され、子どもたちの生活環境や食事環境を整えることが効果的な学習につながると考えられます。

今回は国立がん研究センター東病院呼吸器内科より来られました柴田祐司先生です。MD Anderson Cancer Center Thoracic/Head and Neck Medical OncologyにてPostdoctoral Fellowとして研究に従事されています。動物舎で初めてお会いし、絶対日本人だと感じ、話しかけてもらいました。とても優しい研究熱心な先生です。